

近世語資料としての詞葉新雅

中村, 幸彦

<https://doi.org/10.15017/12278>

出版情報 : 語文研究. 18, pp.83-92, 1964-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

近世語資料としての詞葉新雅

中 村 幸 彦

富士谷御杖編の詞葉新雅一冊は、寛政四年の京都の出版である。見返しに、

此書は和歌和文連歌俳諧共に趣向はたちながら詞心のまゝにいひかねたる時その俗語の頭字につきて部分ぶわの下を求むへし和歌和文の詞を委く考てあてたり

と見えて、和歌和文等の詞(古言)を求める辞書の一であるが、その目的の為に、俗語(里言)から引くべく、本書は、「里言を上とし、古言を下にあて」「おほむね」で、編輯してある。この形式からは、古言訳ではあるが、俗語(里言)の辞書と云ってもよい。総見出し、三一―三語(佐藤茂氏による)、その俗語の中には、ここで近世語と称した、その使用が専ら江戸時代に限られる語も、勿論含まれてゐる。よつて、俚言葉彙や倭訓栞の一部分の如く、近世語辞書として、近世語研究の資料たるべき資格を十分に持つてゐる。富士谷御杖集第五巻に、この書を収めた三宅清氏の解題には、「其

頃の俗語の発音研究の一材料」となると見え、「詞葉新雅の意義」(福井大学学芸部紀要1人文科学第5号)として、その国語学史上の意義を説かれた佐藤茂氏も「近世の上方語を検討して行く上に見逃すことのできないもの」だと述べられたが、その後もさうした研究方面からの利用のあることを、いまだ聞かない。今試みに、俚言葉彙や物類称呼のたぐひまで、その所収の語を採用して、既出の辞書の中では、近世語の最も豊富な平凡社の大辞典や、最近出版を見て、上方語では大辞典の近世語を補正する所の多い前田勇氏の近世上方語辞典などと、二三の点を比較検討するに、本書をもって語彙の補ふべきもの、語釈の改めるべき点などなきにしもあらずと思はれる。

ただし、「方言さまざまにたかひ、又同じ所にすむ人といへとも、各いひつけたる里言もあれと、今はたゞ門人につたへられたるまゝをのせられたは、方言にかなはぬ里言も有へし」と「おほむね」で断つてゐて、そのまゝで当時の上方語だと云ひがたいものもあるかも知れない。が、

ヨタンボウニナツテ (まひしれて)

ノツテキテ (あまえて)

グレハマニナル (たがふ)

ミナニナラメ (つきなき、つきしなき、つきぬ)

など、殊更に、古言に該当する俗言乃至は上方語を見出さうとした意識と努力は十分に見えてゐる。

ただし、古言と俗語とのとり合せ方が、古言元来の意味に相当しない。一步ゆづつて云へば、余りな意識、その古言を引用した古典の用例のみ即した俗語で、その古言の一般的な意味に相応しないものも若干あることは、既に三宅氏の解題にも、例を示して注意してゐる。が、その俗語を日常語として使用した人のかかげたもので、現代の研究家の解釈よりは、その古言訳の方が、その語に相応してゐる例も、けつして少くない。

あてじまひ の語は、故郷原退蔵先生の川柳雑俳用語考が、初めてとりあげ、正しい解を与へたのであるが、その解は、「丁度あてはめたやうな事、あてつけたやうな事等の意に用ひる。嵐吉四郎などの例になると、たゞ名優嵐吉三郎の名をもぢつたい、加減な命名といふ程の意に用ひて居る」とあつて、上方語辞典などもこれに従ふ。勿論これで正しいのであるが、新雅は

アテジマイニ、(そらに、うちつけに)

とある。この古言を現代訳して、「よいかげんに。端的にすぎた。(余りに端的な)」とすると、用語考に見える諸例を悉く満足させず、すつきりとした現代語となるやうである。

けんじやうむき の語は上方語辞典で、多くの例を上げて正しい

解を得たものであるが、その解は「表面向き。表面上。余所行き。改まった態度場合。」とある。これもこれで悪くないが、新雅には、

ケンジャウムニキ(なみに)

とあつて、「なみに」を「世間向、世間体」と訳せば、一語で、片がつくやうである。

ほうがら も、上方語辞典に始めてかかげられた語で、「中身の無い殻」と解され、別に「ほがら」と同じとして、「ほがら」には、一に、「木の實などの、中のうつろなもの。「ほうがら」とも、今はホンガラという」とし、二に、「有名無実」と解して、諸例を上げてある。これもこれでよいのであるが、新雅には、

ホウガラナ(むなしき、うつに)

と抽象的な意味が既にあたへてある。上方語辞典以外の二二の例、名玉女舞鶴(寛保二)一の二「日幸にはおやましやらんといふ者、沢山に有て男をだまして、あほうにすると聞たれば、大節に思ふ万戸殿を、ほうがらにしてみらふてはなるまい」と

油商人郎話二ツ目「おまへ様にて立ねはならぬ内方の身代、それにもあよしもないわらにほうがらにしられてあとでこう會」

などに照合しても、「うつに」と云ふ解が誠に相当する。大辞典に「ほんやり、うつけもの」と解してある「うつ」である。以上の若干の例から見ても、編者御杖(と云つても、既に、父成章が試みた古言の俗語訳を用いた所もあらうが)にも、父成章、伯父淇園が待つてゐた、すぐれた言葉の感覚が、やはり富士谷家の人として、流れてゐて、その古言訳は、かなりの信用度で、利用出来る

思つてよいのである。

音韻の方面でも、

タカイニハラタテル、タガイチサイニ

カラタヲナイ物ニスル、カラダヲ粉ニシテ

など一つの語で、正濁（勿論上の方の濁点が落ちてゐるのだが）を違へて掲げた例もあつて、十分に注意されてゐないし、

イツシヨコウニ（ひとつに）

の如く、或は「ウ」は「タ」の誤刻、

カタイツサウニ（ひたふるに）

の如く、「サ」は「ホ」の誤刻かと思はれる所もなくはなく、万全に従ふことは多少の危険を感ずる。しかし、促音の「ツ」には、側に「。」をつけて表記したり、

ワルくウ（まがくしく）

ワルウナイヤウスジヤ（けにくからず）

を見れば、上方語に多いウ音便も、注意して示さうと努めたことも明らかである。

タツブミ（たてぶみ）

は、立文が当時、「タツブミ」と訛つてゐたことの証となるものと思ふが、どの辞書にも上つてゐない。

カタホデワラウ（かたむむ、ほくむむ）

カウアロトハ思ハナシヤ（おもひきや、思ひかけきや）

の如く、長短発音のさまを如実に示したのも見えて、三宅氏の発音の材料とすべしとの言は従ふべきである。

若干の注意をもつてのぞめば、詞彙新雅は十分に近世語の資料た

り得るものである。

よつて、以下に、この書を利用する、いくつかの方法を、具体的に示して見よう。

二

先づ従来の辞書類に上つてゐる言葉の解釈を、これによつて補ひ、正すことが出来る。

うつきりと この語は上方辞語典に、

うつきりと、副、うきうきしたさまか。延享元年、潤色江戸紫一

と、疑問をもつた解釈で上つてゐる。新雅には、

ウツキリト（さやかに、さやく、さやか）

ウツキリトシタ（きよらに、あざやかに、物あざやかに、けうらに）

ウツキリセヌ（びさうなき）

ドコヤラウツキリト（物あざやかに）

とあつて、「あでやか」「あざやか」「綺麗な」などの意味と見える。今一例、

愛染毬八代物語（正徳五）四下の一「幼稚の比より洗ひみがきゆ

へか、究めてうつきりとせしにより人の目にたつものはなり

り」

に照らしても、新雅の意でよいことになる。新雅に従つて改めるべきである。ただしこの「うつきり」の語には、

信徳十百韻（延宝三）「小ふくるふらり供の小めらう//うつきり

の髪にも残る伊達姿//目安のうちに名や立ぬらん」

舞臺抄(寛政十三感)二「うつきりにしてくろちりのはおり」の如く「すっぱりと切る」と解せる如き例があり、それと前掲の語意との關係はありさうであるが、よくわからない。参考までに上げておく。

しつはく は六辞典は原義として、質朴(しつぱく)を上げ、その転としてゐるのはよいとして、転義に、「容易に他に従はぬ性質。がうじやう」とし、

念仏往生記五「五色の鬼共呆れはて、偕も偕もしつはく成念仏者や」

を上げる。上方語辞典も、同じ例で「頑固。強情」とする。この一例から見ると、この解でよささうであるが、さかのぼって、近松語彙は「撲直。律義の意に云ふ」として、質朴の転なることを、同じ例で説明する。新雅は、

シツバクナ(くすしき)

とある。「くすしき」は現代語釈して、「奇特な」「実直な」であつて、近松語彙に近いが、質朴の原義から出たとすれば、この方が自然である。往生記の例も、鬼共が、その念仏者の実直さにあきれたと解してよい。「強情」は意識に過ぎたもので、「しつはく」の近世語は、「実直。奇特。律義」などの解にとどめるべきを、新雅の注は、教へる如きである。

どんつく も上方語辞典にあつて、「とんま。まぬけ。文政力新板かわりもんく粹言葉」「たいこやのもちつきで、どんつくちや」とある。これは、これでよいのであらうが、新雅では、

ドンツク とがむる

トガメル 同上

とあつて、動詞である。思ふに「どん」は、上方語の形容動詞で「どんな」、形容詞で「どんくさい」と用ゐられる「どん」即ち、馬鹿や失敗やその他おろかしいことをさす語であつて、「つく」は指摘するの意であらう。

とすれば「どんつく」の原義は、新雅の示す動詞であつた。それが粹言葉の如く、「どんをつかれる者」をさすやうになつたのは、早くから上方にもあつたとんてき(柳亭記巻下にこの語の考証あり、上方では、諸分姥櫻二、それそれぐさ、武道張合大鑑三など元禄頃から見えてゐる)や、深川方言のとんちきなどの類似から出たものかと考へる。

むしずる も大辞典では、長野県東筑摩郡の方言として上げ、「穀類に蟲がたかつて喰つたもの」と、名詞として上げるが、新雅では、ムシズル(むしはむ)

と動詞である。これは今も上方近い所で、動詞として生きてゐる語ではないかと思はれるが、いかゞであらう。

びしよがない この語は大辞典に、

ビシヨナイ 方言。きたない。不潔。山形県村上地方

ビシヨナシ 方言。ものうさ。懶惰。宮城県

と方言としてのみ掲げる。上方語辞典の

ひしよ 見ば・見えの意か。安永六年、伊賀越乗掛合羽(脚)六詰「肴の鱈は余りかはいらしい小さいものぢやによつて、頭取るとひしよがない、首はお前様がた取つて上つて下さりませ」とある「ひしよがない」は濁つて読んで、大辞典の方言と同じ語と

すべきである。と云ふのは、新雅に、

ピシヨガナイ(びさうなき、ものげなき)とあるによる。方言の方は「びさうなき」の方から出、伊賀越乗掛合羽の例は「ものげなき」の解が相当し、上方語辞典により「見が悪い」と解してもよいであらう。よつてこの語は上方語として、「美しくない、見てく
れが悪い」意で、用ゐられてゐた語となる。

三

第二に、従来の辞書類が地方の方言でのみ上げるが、新雅による
と、近世では上方語であつたことを証するものが多い。

えりわり「わざと、殊さらに」の意であるが、物類称呼では、
「尾張にて〇ゑりわざといふ。東武にて〇ゑりわりといふ」と見
え、大辞典も佐渡島の方言として上げる。新雅に、

エリワリ(わざと、ふりはへて、さしはへて)
と見える。江戸詞をわざわざ上げねば、示されないやうな、むつか
しい古語ではないから、やはり上方で、当時普通に使用してゐた語
であらう。称呼が、東武としたのは、尾州方言との違ひを示すべく
附したので、江戸方言と云ふ程強い意味でなかつたと解すべきであ
る。

ほつける は新雅に、

ホツケル(はつる、糸ナリ)

と、組糸の小口などの自然とほつれることを云ふやうに解してある
が、大辞典では、この語は、

ホツケル、勲、方言。こぐちからほろほろ壞れること。淡路島

としてのせる。元來この語は、「ほつく」から出た語と思はれる。

「ほつく」は大辞典では、「ほつき歩く」意で、うろつくを第一義
に、第二義に「打込む、つきこむ、つかひ果たす」の意をあてて、

浮世親仁形氣(享保五) 三「親仁が金をほつく故、何程儲けても
尻も結ばぬ絲にて」

と、今一つ夏井筒上の例を上げる。親仁形氣の例は糸の縁語にもな
つて、かたがた、「ほつける」「ほつく」は同系の語と思はれる。

世間長者容氣(宝曆四) 二の三「心のまゝに身上を頼き、吾妻を
受出して後も、御地頭へ勘定たゞず」

と、「頼」の文字を上げてあるのから見れば、「ほつく」は財産で
も一度になくなることでなく、「ほつける」やうに、次第次第に、
しまりなくなつてゆくことを意味するやうである。以上「ほつく」
と比較することで、この語は寛政頃には上方で用ゐられてゐたこと
と、「ほつく」の正しい意味が明らかになる。

なからはんじやく この語は大辞典では、

浮世風呂二(文化七)下「重忠は半半尺で役目を龜末にするはな

を上げて、「中途半端、よいかげん、いいかげん」と解する。浮世
風呂の請注釈書も同じである。しかるに新雅には、

ナカラハンチャクナ(をれたる、をれしき、はしたなき)

とある。「はしたなき」の方が、中途半端に相当するが、その他に
「をれたる」、「をれしき」と云ふ「感しさ」の意を持つてゐ
る如くである。「はしたなし」にも、「だらしない」などの意があ
るから、これも亦「をれしき」に近い。筆者の故郷は淡路島であ
るが、淡路に「なまりはんじやく」なる語があつて仕事をしないな

まけ者を云ふ。「なまりはんじやく」は、当然「ナカラハンチャク」の転化であらうから、この專はこの上方語に、なまけ者に近い「をれくし」の語義のあつたことの傍証となる。「ナカラハンチャク」は元來に上方語であり、浮世風俗の例とは違つた語義でも使はれてゐたことが、新雅によつて明らかになる。これに似たのが、「ちうはん」である。新雅に、

チウハン（はしたなし、はした、なか／＼なる、なか空）
チウハンナ物シリ（おれもの）

と二つ上がる。後者から見ても、この語にも、大辞典のかゝる「中途半端」の意の外に、非難の意のこもつた別義があつたのである。なほ、同類は、

ハンチャナ（なか／＼なる）

がある。衣類の「はんでん」を「はんちや」と云ふが、それと關係があるかも知れない。

チウブンノ人カラ（なまもの）

とあるも、「なまもの」は「なまいきな人」などの意とすると、中途半端の悪い意を持つたのと同じ方の語と見える。

さんきやくも大辞典に、滋賀県蒲生郡の方言として、「早合点すること」の意が附されてゐるが、新雅に、

サンキヤクナ（ものげなき、かる／＼しき）

と見える。これによると、万寧に「軽はずみ」「軽々しい」ことと、滋賀県の方言は、この語の一面の意味のみが、その處で定着したか、狭い語彙が、与へられたかのいづれかにならう。

「すばしこい」を「すばしさい」、「じつくり」を「じつちり」と

云ふやうな、今は地方の方言にのみ残る、音韻上の転化が、寛政の上方にあつたことを示す例は、多いが省略に従ふ。ただし、大辞典を主に、この方言との問題を見たが、大辞典の「方言」の注記は、むしろ方言集から、その見出し語を採用したことを意味するものと解すべきで、外でも、文学作品にも見えて、この辞典の方言で、その解を得る例は乏しくない。以上は事々しく云ふべきでないかも知れないが、新雅の近世語を紹介する一方法として、大辞典の方言と比較したものを見られたい。

四

新雅にあつて、既出の辞書に未載の語は、今簡単な調査であるが、約五〇語に上る。その中から、いくらかを摘出紹介する。

どみる 新雅は、

ドミル（にばむ、紫のにばめる紙トアリ、源）

と。この例は源氏の葵の巻に見えるが、外に

源氏、葵「にばめる御衣たてまつれるも」（新しい註は「鈍色がかつた」と解）

同、柏木「こまやかににばめる汗衫」

とあつて、色のさえない様を云ふやうである。近世の例では、

うちくもり砥（天和二）「夕日曇て菅の枯橋に書を荷ふ」

などである。やはり夕日の光のさえぬさまに用ゐてある。

にべもつけずに「無愛想」とか「すげない」の意に「にべ（魚膠）もしやしやりもない」とか「にべない」と云ふ例は多いし、少し變つては、

風流漢楚軍談(享保三)二「にべもさゝもない口上」
など云ふも、同じ意であるが、新雅に、

ニベモツケズニ(すげなう)

とある。文学作品には、余り見えないやうに思ふのだが、やはり使用された語であらう。「とつつかの悪い」意を端的に示してゐる。

くいきりがない 新雅に、

クイキリガナイ(わづらふ、わづらはし)も、見ない語である。

「クヒキリ」(喰切)で食事の進まないことか、「くぎり」の意で思ひわづらふことかなどと想像するけれど、確かでない。

ふぐめん これは「不工面」であらうが、余り見ない。新雅に、
フグメンナ(びんなき、ふびんなる)

とある。かへつて、江戸版の、

「当世穴穿(明和六)一「私も近年の世上ふけいきにつれて大のふ

くめん」

と見えて、当時は一般の語らしい。

ももける 新雅に、

モ、ケル(あつごゆる、源菜きばみあつごえる紙云々)

ぼつたりして、毛ばだつたやうなのをさすので、若干意訳の気味がある。「もける」などの語は、どこかに所載されてゐるさうに思はれるが、ない。当時の例、

当世廓中掃除(文化四)一「綿の頬冠の桃毛立たの。」

もあつて、近世からの上方語に相違ない。所載がありそうでない例を二、つゞけると、

かたそつべら カタソツペラ(かたかど、かたはし)

これは、

世間学者氣質(明和五)一「実語教のおしえ、かたそつべら聞覚へて。」

まかなひばば マカナイババ(たうめ、をさめ、紀二專領ヲ訓ズ)

これも、

世間学者氣質(明和五)一「まかない婆が、独はきしませうにも
函がよく」

と用例もすぐ見つかれるが、諸辞書は欠いてゐる。

あとすぼり アトスボリニ(しりびに、いとしりびに)
大辞典には「しりすぼまり」の語があり、上方では今も「しりすぼみ」と云ふと同じである。

いちむぎ イチムキニ(ひたすら、ひたふるに)

「いちづ」と云ふと同じ意であらう。

うぼく ウボく(ト(あくかるゝ、あこかるゝトモ)

「うかうか」と同じ意のやうに思はれる。

おほばへ

オホバヘニ(おほどきて、おほどかに)

オホバヘナ(ゆほひかなる)

と二つ上つてゐて、心持でも風景などでも、ゆつたりした気持を云ふ言葉らしい。

きむぎ オンナジキムキ(おなじ心)

「氣向」であらう。

けんどう は

ケンドウニ(こちたく)

ケンドウニイフ(そはくしくいふ)

とある。一つの例ならば「けんどん」の誤刻かと思はれたのであるが、「けんどん」の訛として、かかる言葉があつたと見なければならぬ。

ねぬけ

ネヌケノシタ（おほろげならぬ）

ネヌケノセヌ（おぼろげの）

の二例があり、「ねぬけ」のしたとは、「徹底的」とか「根本的」とか云ふ意であらう。大辞典は、実は、この意の用例、

宝蔵・茶壺（寛文）「見事なことの根ぬけ」

を上げながら、これを「ねぬき」（根拔、生拔の意）へ一つにしてい入れてしまったので、この語が見出し語として上らずにしまった。

智恵鑑（万治三）二「孔子のむしろ太王の杖などはいづれも周の

時代の物なれば、ねぬけとは申がたし」

の例も、古いものの最上とは云へないの意である。この語は又「根がぬける」と、動詞になる場合もある。

夕霧有馬の松（宝曆二）四「大藏少し雲に汗氣の出来た心地して、とかく汝でなければ根がぬけぬ」

も、「物が徹底しない」などの意であらう。

ひきき ヒキ気ナ（ひそめる、ひそみ心）

とあつて、「内輪な気象」とか、「ひっこみ思案」との意。

むつちやり

ムツチャリトシタ（あやなき、あやめもしらぬ）

ムツチャリトシテ（ねびれて目モト鼻モトナド也）

と見える。寝びれ、顔つきのぼやけたさま、諸事、不明瞭なこと

を指す語らしい、これに関係あるのは、

むちやつく

ムチャツイタカホ（ねびれたるかほ）

ムチャツキナシニ（くまなく）

と見える。「むちやつく」を大辞典に「もつれ起る。紛擾する」と解してゐるが、大体あたつてゐる。「あやなし」「くまなし」の反対になることが「ムチャツク」である。

むがに ムガニ（つみなきさまに、じほうに）

「じほう」は「実法」であらうから、「すなほ」と解すると、「むが」は「無我」かとも想像されるが、左様な仏教語が、一般化してゐたかどうか明かにしえない。

めんめんこう

メンメンコウニ（おのがじ）

「めんめん」でよいのだが、「こう」がつく。「こう」は「講」でもあらうか。講を結び共同で行ふべきを、一人のみの講（その様なものはないが）の体で、事を行ふの意であらう。

なほ若干の語は省略して、中には、はたしてさうした語が実際あつたか否か、今の私としては、或は御杖らが仮に作つたのではないかとも思はれるいくつかを示して、疑問を存しておかう。

まけきしい マケオシイ（ねたし）

「負惜み」の形容詞であるが、いかゞであらう。

しめわらひ シメワライスル（むゝとわらふ）

しめやかに笑ふの意であらうし、あれば好ましい語であるが、当時の俗語にこのやうな語があつたとは一寸思はれない。

あさらい

アサライ(あさき、あさはかなる)

アサロウナル(あせて、水あせて、色あせてナトヨメリ)

水や色又は思案など諸事に浅いことの形容詞である。動詞では「あさらふ」となるらしい。ここで思ふのは、「浅ら井」と云ふ名詞や、万葉集に見える「あさらか」などの語である。この「あさら」を動詞にし、形容詞にしたのかと思はれるがいかにであらうか。

かすらふ カスラハヌ(つれなき、あいなき)これも、軽くふれる意の「かする」と云ふ動詞から作ったやうな気味がある。

あなほせり アナホゼリニ(あながちに)と見える。大辞典が詞葉新雅からとつたと思はれる、ただ一つの語で、

アナホゼリニ、副、あながちに。しひて。おして。無理に。

とあるが、現実はこの語があつたか、用例の出でくるまでは一寸信じがたいのである。かかる例もあることからして、この書から、近世語を拾ふ場合にも、何がしかの注意は是非必要なことを、最後に一度附言する。

五

勿々、詞葉新雅より、近世語としてあつかつてよささうな語を抽出する操作を続けながら、私の頭を去来する思ひに、近世語の研究の他時代に比しておかれてゐる現状がある。時代語の研究の第一の着手であるべき語彙、語彙についてさへも、こんな普通の資料に見えるものが、まだ辞書に登載されずにゐる。それはどうした原因によるものであらうか。ひそかに思ふに、従来の研究対象が、余

りに文学作品に片寄りすぎてゐるからではあるまいか。勿論、近世のいはゆる俗文学は、当時の言語生活を如実に伝えることは、事実であり、それを無視して、近世語の研究が出来るとは思はれないが、まだいくらもこれに加へる資料がありさうに思ふ。例へばおびたゞしい教に上る崎門学派の語録や講義類は口語体でしるしとゞめられてゐるが、語学方面に暗い私のごとで、不確かであるが、未だ語学者の研究対象になつたことを聞いてゐない。この詞葉新雅と逆に、古典の訳、又は古典語の牌の中からも、古典と対比して意味の明らかな近世語があるのではないか。遠い記憶で、またノートにもとゞめてないが、季吟の源氏や枕の注釈の中でも、所々に「おや」と思はれた近世語があつたやうに思ふ。さうした文学作品以外に資料も求めることは又、文学作品の中から採り出す語を有とこ引用する為にも必要ではないかと考へる。

と云ふのは、近世語の従来の研究で欠点と云つてもよい、対象たる作品の性格をよく考へずに利用するの弊を、それによつて是正出来るかと思はれるからである。これまで迄々、一つの作品の作られた年代や土地と土地をもつて、その中の言葉が実際に使用された年代や土地として検討されて来てゐる。しかし近世の文学作品は、一つの型式様式が出来上ると、やがてそれが類型化する傾向を持つてゐる。類型化した作品では、類型化された描写があつて、その描写中では、現実に生きてない言葉も使用されるのである。いはゆる俗文学の一方で、なほ生きてゐた和歌和文など古典文学が、類型化して、その描写や用語がかたまつてゐたと同じ現象が、俗文学でも存在することが珍しくないのである。口語の会話文が多いからと

て、しばしば語学研究の材料となる義太夫浄瑠璃の如きは、語り物なる性質の故もあって、類型化の甚しかったことはここで云ふまでもない。よつて浄瑠璃では、元禄享保の上方の浄瑠璃に見える語句が、天明の江戸の浄瑠璃にも見えるものが多い。これは浄瑠璃の中で常に使用される、他面から見れば、最早一般社安でも珍しくなつた、浄瑠璃語とも云ふべきものが出来上つたことを物語る。一方上方でも享保を境にして、言葉づかひに変化のあつたことは、当時の人々も気づいていたことは、色々の書に見える。又享保前後の、小説類などの用語を比較してもそのことが証される。とすれば浄瑠璃を資料とするに際しては、この事実を十分に留意しなければ、浄瑠璃語の研究は出来ても、近世語の研究には直ちにはならないことになる。洒落本や滑稽本と云ふ社会を活写すべく発生した作品群でさへも、この類型化の現象が認められることは、詳述する別の機会にゆづる。となれば、これらにも浄瑠璃同様の留意が必要である。語録や、辞書類は（講義にはやはり型がある）、その点、とらはれる所の少く、当時にわからせる為のものであつて、これらを使用すること、文学作品と合せ使用することは、前述の作品の出版年代や土地にまだわされることなく、新古にかかはらず、どの言葉が如何に一般的であり、既に特殊化されたかなどの判定に役立ち、生きた言語生活をさぐる事が出来るのではなからうか。以上寸感を附言して擧筆する。

執筆後気づいた。これも富士谷学の語学的方法をうかがふ論で、近世語についてのものではなかつた。

附記 建部一男氏に「詞葉新雅における里言と雅言」(立命館大学日本文学部編論究日本文学第二二号)なる論文のあることを